

研修効果評価のための運転技能測定手法に関する調査研究（Ⅱ）（平成6年度）

自動車安全運転センター安全運転中央研修所では、研修の内容を一層充実・強化していくために、研修効果を客観的に評価するための運転技能測定手法が求められている。そこで、平成5年度から3ヵ年計画で調査研究を行っており、2年度目は、青少年運転者課程受講者の研修前後の評価及び一般企業運転者課程受講者の研修後の変化について調査した。

- ① 青少年運転者課程を受講した27名の被験者を対象に、スラローム走行、車幅感覚の測定、交差点右折時の運転行動の測定、模擬市街路における運転行動の測定、危険感受度診断テストの調査を行った。一般・企業運転者課程を1年前に受講した15名の被験者を対象に、スラローム走行時のシートポジションを測定した。また、被験者アンケートを行った。
- ② 青少年運転者課程受講者の走行結果をみると、スラローム走行時の体の振れは、多くの被験者で効果があった。前後左右の車

表 各項目の被験者別評価（青少年運転者課程）

被験者番号	スラローム走行	右折時の対向車間距離	危険感受度診断
1	○	○	△
2	○	○	○
3	△	○	△
4	○	○	△
5	--	○	△
6	--	○	×
7	--	×	○
8	--	×	○
9	--	○	○
10	△	○	○
11	△	○	○
12	○	○	○
13	△	×	△
14	○	×	△
15	○	○	○
16	×	○	○
17	--	○	○
18	△	○	△
19	○	○	○
20	--	×	△
21	--	○	×
22	△	○	△
23	--	○	×
24	○	○	○
25	--	○	○
26	○	○	○
27	△	×	○

幅感覚については、前後に寄せられるようになった被験者が多かった。右折時の車間距離については、研修後におおむね長くなっていたが、研修後においても必要と思われるほどではなかった。前照灯点灯時の速度感覚は50 km/hの実走行車両で被験者平均59 km/hであった。模擬市街路でのパネルの発見を通した注視行動は、研修前後でほとんど変化がみられなかった。危険感受度診断テストでは研修前後に総合評価で幾分変化が認められた（表）。

- ③ 一般・企業運転者課程の研修1年後における被験者15名の評価では、スラローム走行では、体の振れが元に戻っていると思われる被験者が多かった。安全運転の意識は、アンケート上では、高い意識が継続している。
- ④ 今後、各項目における評価の関連や、被験者の心理的傾向別の分析も行う必要がある。